

令和4年度 学校総合評価

6 今年度の重点課題に対する総合評価

本校での現状を踏まえ、3項目の重点課題を設定して取り組んだ。各重点項目の目標についてはおおむね達成することができた。取組の概要と評価は下記のとおりである。

(1) **生徒が自己実現を目指し、自己肯定感を高めながら主体的に学んだり、自己決定したりするための支援の工夫**

生徒が記入しやすいようキャリアパスポートのレイダーチャートの様式を改訂し、学期に一度記入及び聞き取りの機会を設けた。年度末の自己評価では、自身の変容についてまとめる際にレイダーチャートを活用し、自己分析・自己理解につなげた。自立活動の指導のやり方、指導案検討、授業視聴を行い、授業等で実践したことや、事例に挙げた生徒の変容について共通理解を図ったが、自己理解の深まりには、さらなる支援が必要である。

(2) **緊急時における救急体制の整備及び対応訓練の充実**

緊急対応カードの様式の統一やマニュアルの見直しを行った。それをもとに対処訓練を各学部で3回実施し、緊急時の対応力を高めた。医療的ケアを受ける児童生徒のカニューレ抜去時の緊急度や搬送先等について教員間で情報共有、個人情報に記載した緊急連絡カードの保管場所の統一や救急用品の整備・配備等、実際の場面での活用のしやすさを工夫した。

(3) **本校の学校課題解明に活かすための北畠研研究大会における情報収集及び情報発信**

研究大会後に事後アンケートを参加者に対して行い、まとめを行った。理事会での成果と課題の報告や本校職員への周知を図り、各学部で研究大会で得られた成果と課題の分析・整理を促して、各学部の課題解決に生かした。幼児児童生徒の少人数化や障害の重度重複化・多様化への対応や個別最適化の取組を行うことの必要性を確認した。

7 次年度へ向けての課題と方策

- (1) キャリア・パスポート等を活用しながら自己評価や行事等の振り返り等を言語化する活動を積み重ねる。生徒の自己理解を深めるために自己評価に加えて他者評価も取り入れる。生徒の思いを聞き取るために、対話する時間を確保できるように工夫する。
- (2) 緊急対応カードを活用した訓練を積み重ね、見直しを続ける。救急隊や保護者を含めた訓練を実施し課題を明確にする。緊急時における教員のより一層の対応力向上を図る。
- (3) 学校課題解明には向けて授業研究を実施する。教員間の情報交換の時間をもつための工夫を行い、明らかになった幼児児童生徒の成長と今後の課題を教職員全体で共通理解し、研究を進める。

(様式5)

8 学校アクションプラン

令和4年度 富山聴覚総合支援学校アクションプラン (高等部) - 1 -		
重点項目	学習活動	
重点課題	生徒が自己実現を目指し、自己肯定感を高めながら主体的に学んだり、自己決定したりするための支援の工夫	
現 状	現在の本校高等部の生徒は、聴覚障害を有する生徒と知的障害を有する生徒が在籍している。卒業後の進路について漠然と考えている生徒が多く、進路の実現のために具体的な目標を掲げ、目標に向けた自身の課題を明確にすることが難しい生徒が多い。そこで高等部では、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく生徒を育てるため、キャリア・パスポートを活用して、自己の課題を見つめ、解決していくよう取り組んでいる。行事や就業体験等の事前事後指導で、振り返りの機会を多く設定することで、自己理解を深め、進路選択や自己実現に生かしていく必要がある。	
達成目標	レイダーチャートを用いた生徒の自己評価 及び教員による聞き取りの回数	キャリア・パスポートを基にした事例検討等 のグループでの話し合い回数
	年間3回	5回以上
方 策	<ul style="list-style-type: none">生徒が理解しやすいようレイダーチャートによる評価表を改善し、生徒自身の評価につなげる。また、生徒の自己評価について、教員により聞き取りを実施し、生徒がどのように考えて評価をしたのかを把握する。	<ul style="list-style-type: none">部会研究においてキャリア・パスポートを基に、生徒についての情報を共有するとともに、授業等での支援の方法について話し合う。生徒が記入しやすいようなキャリア・パスポートになるよう様式や内容について検討する。キャリア教育の4領域について、どの場面で支援していくかを明確にし、支援の方法や生徒の変容について共通理解を図る。
達 成 度	3回実施 (100%)	5回実施 (100%)
具体的な 取組状況	<ul style="list-style-type: none">年度当初に、生徒が記入しやすいようレイダーチャートを改訂し、学期に一度記入及び聞き取りの機会を設けた。2学期は、就業体験や学期末考査等の時期と記入時期が重なり、十分な聞き取りの時間を設けることが難しかったクラスもある。年度末にもレイダーチャートによる自己評価を実施し、今年度の自身の変容についてまとめる。	<ul style="list-style-type: none">生徒が記入しやすいようレイダーチャートの項目をそれぞれのグループで検討し改訂した。キャリア教育の4領域に着目し、どの場面でのような支援が必要かについて、生徒の実態を踏まえて検討した。自立活動の指導のやり方、指導案検討、授業視聴を行った。授業等で実践したことや、事例に挙げた生徒の変容について各グループで共通理解を図った。
評 価	A	① B ② A ※2項目の達成度から総合評価を判断
学校関係 者の意見	<ul style="list-style-type: none">キャリア・パスポート等を活用しながら自己評価や行事等の振り返り等を言語化する活動を積み重ねていってほしい。自己評価に加えて他者評価も取り入れることが、生徒の自己理解を深めることにつながるのではないか。	
次年度へ 向けての 課 題	自己評価や行事等の事前事後学習でキャリア・パスポートを活用することは定着してきたが、行事や就業体験等やらなければならないことが多く、対話の時間を十分確保できないことが課題である。自分の思いを言葉で表現することが難しい生徒たちであるからこそ、聞き取る、対話する時間を確保できるように工夫していきたい。	

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった)

重点項目	学校生活	
重点課題	緊急時における救急体制の整備及び対応訓練の充実	
現 状	<ul style="list-style-type: none"> 各学部の幼児児童生徒の実態に応じて具体例を基に、教員の対応力を高めるため、本校では学部ごとに緊急対応訓練を実施している。しかし、緊急時に使用予定の緊急対応カードについて、各学部で様式が異なりかつ煩雑であるため、緊急時に学部間でスムーズに連携を図ることができるような学校共通の緊急対応カードを整備する必要がある。 昨年度の緊急対応訓練の実施回数は、各学部1～2回であった。今年度は医療的ケアを必要とする児童生徒が4名在籍している。緊急対応カードの使用を含め、救急体制や緊急時に対応可能な環境を整備すると同時に、様々な場面を想定した訓練を実施し、訓練後の反省を生かすことで、救急体制の改善や教員の対応力の向上につなげる必要がある。 	
達成目標	①緊急対応訓練の実施回数 ・教員の対応力の向上を図る	②R3年度の緊急対応訓練の反省内容の改善率 ・救急体制や環境を整備する
	各学部 年3回以上	90%以上
方 策	<ul style="list-style-type: none"> 緊急時の連絡体制を正確にかつ見やすく示した、学校共通の緊急対応カードを作成・配備する。 各学部の実態に応じ、対象の幼児児童生徒や事故の発生場所・時間等を変え、様々な場面を想定した訓練を年に3回以上実施する。 研修会等を通して、医療的ケアを受ける児童生徒の実態や熱中症や頭部外傷等事故内容による初期対応の違いについて、教員への周知を図る。 他学部教員も訓練に加わることで、学部間の連携を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 昨年度の反省を受け、連絡体制の検討、「たすけんと」の教室表記の統一、毛布等の救急用品の配備を行い、共通理解を図る。 医療的ケアを受ける児童生徒の個人情報について、教室における管理の在り方を検討する。 各学部の緊急対応訓練の反省を受け、次回の訓練までに改善を図る。また、改善内容を他学部の訓練で反映させることで共通理解を図り、学校全体のより良い救急体制や環境の整備につなげる。
達成度	各学部 3回実施 (100%)	80% (4/5改善)
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> 緊急対応カードの様式を統一し「事故発見者」「指示者」「協力者」の役割を明記した。 カニューレの抜去や頭部外傷等の事故を想定し、緊急対応カードを使った対応訓練を各学部で3回実施した。 医療的ケアを受ける児童生徒の在籍する学部では、カニューレ抜去時の緊急度や対応、搬送先等を確認した。また全教職員に対して、熱中症や頭部外傷、嘔吐等への対応を確認した。 3回目の緊急対応訓練は、幼・小学部、中・高等部合同で実施した。 	<ul style="list-style-type: none"> 連絡体制について、重症度の判断基準を示し緊急時は直接救急車を呼ぶこと等を明記した。 「たすけんと」は新システムに移行するため教室表記については、関係のある学部と共通理解を図るにとどまった。 救急用品について、各教室棟の各階に保健コーナーを設け、緊急対応カードや毛布、嘔吐物処理セット等を配備した。 個人情報を記載した緊急連絡カードについて、教室内の保管場所を統一し、教員や学級内の児童生徒と共通理解を図った。 救急車の誘導場所を想定して、駐車スペースを設けた。
評 価	B	① A ② B ※2項目の達成度から総合評価を判断
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> 緊急対応カードを活用した訓練を積み重ね、今後も見直して続けていくとよい。 救急隊や保護者を含めた訓練を実施することで問題点を明確にしていってほしい。 緊急時に持ち運びやすいように、救急用品の保管方法の工夫が必要である。 	
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> 「たすけんと」から新システムへの移行に合わせて、緊急対応カードを変更する。 様々な場面を想定し、他学部や関係機関等と連携しながら対応訓練を重ね、緊急時における教員のより一層の対応力向上を図る必要がある。 	

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:現状維持 D:現状より悪くなった)

重点項目	その他	
重点課題	本校の学校課題解明に活かすための北聾研研究大会における情報収集及び情報発信	
現 状	<p>聴覚障害児（者）を取り巻く環境は、医療の進歩による難聴の早期発見、インクルーシブ教育の構築、手話言語条例の制定等、大きく変化してきている。また、北陸地区5校において、在籍数の減少、人工内耳装用児や重複障害児の増加、進路の多様化、知的障害のある生徒との共生等、各校の課題は多岐にわたっている。そのため、北陸地区聾教育研究会（北聾研）では2年前から統一テーマを設けず、各校が学校課題を基に研究主題を設定し、研究を進めている。その中で、今年度、本校は北聾研の事務局として研究大会を運営することになっている。</p> <p>そこで、研修部では、研究大会や事務局運営について北聾研関係者から情報収集を行い、授業研究や分科会をとおして明らかになった成果や課題を本校における今後の学校課題を考える上での指針としていきたいと考えた。</p>	
達成目標	北聾研研究大会に関する情報収集及び情報発信	研究大会で得られた成果と課題を踏まえた学校課題及び学部課題の検討
	2回	2回
方 策	<ul style="list-style-type: none"> 研究大会や事務局運営についてのアンケート調査を北聾研関係者に行い、まとめる。 成果と課題を明らかにして、関係職員に周知する。（本校職員へはインフォメーションに掲載、北聾研理事へはメールに添付して送付） 	<ul style="list-style-type: none"> 各学部の部会研究において、研究大会で得られた成果と課題を分析・整理し、各学部の課題解決に生かす。 研修部会において、研究大会及び各学部の成果と課題をまとめ、次年度以降の学校課題について検討する。
達 成 度	2回実施（100%）	2回実施（100%）
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> 研究大会後に事後アンケートを研究会参加者に対して行い、まとめを行った。 事後アンケートのまとめを北聾研理事には事前にメール添付にて送信し、理事会で成果と課題を報告した。また、本校職員にはインフォメーション掲載で周知を図った。 	<ul style="list-style-type: none"> 各学部の部会研究において、研究大会で得られた成果と課題を分析・整理し、各学部の課題解決に生かすよう促した。 研修部会において、研究大会及び各学部の成果と課題を聞き取り、次年度以降の学校課題について検討した。幼児児童生徒の少人数化や障害の重度重複化・多様化への対応や個別最適化への取組が課題として挙げられた。
評 価	A	① A ② B ※2項目の達成度から総合評価を判断
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> 学校課題解明には授業研究が一番大事である。授業研究を数多く行うとよい。 教員間の情報交換の時間をもつための工夫をし、共通理解をしながら研究を進めていくとよい。 	
次年度へ向けての課題	北聾研研究大会に関する情報収集及び情報発信、研究大会で得られた成果と課題のまとめを通して、幼児児童生徒の成長や今後の課題を確認することができた。これらを踏まえて、次年度以降の学校課題について早急に検討し、教職員全体で共通理解を図る必要がある。	

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった)